法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-03-14

〈図書紹介〉『ラフカディオ・ハーンの思想と文学』 大東俊一著 彩流社 二〇〇四年 『ラフカディオ・ハーン入門』 先川暢郎・大東俊一箸 ブイツーソリューション 二〇〇八年

伊藤, 直樹 / ITO, Naoki

(出版者 / Publisher)
法政哲学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Bulletin of Hosei Society for Philosophy / 法政哲学
(号 / Number)
5
(開始ページ / Start Page)
58
(終了ページ / End Page)
58
(発行年 / Year)
2009-06
(URL)
https://doi.org/10.15002/00007928

Hosei University Repository

【図書紹介】

『ラフカディオ・ハーンの思想と文学』

大東俊一著　彩流社　二〇〇四年

『ラフカディオ・ハーン入門』

先川暢郎・大東俊一著　ブイツーソリューション　二〇〇八年

伊藤　直樹

ここで紹介する二著は、前者がハーンについての研究書、そして後者が紹介の書である。

ラフカディオ・ハーン／小泉八雲といえば、「耳無し法一」「雪女」「むじな」などが収録された『怪談』で、また『心』などにおさめられたエッセイでよく知られている。どれも「日本人」のこころの琴線にふれる珠玉の文章である。ただ、興味深いのは、これらの物語やエッセイが、ハーン自身のオリジナルな創作ではなく、むしろ、多くが再話から成り立っていることである。たとえば『怪談』は、『今昔物語』『古今著門集』などの古典にある原話を語り直したものである。そしてまた、エッセイ風の文章にも、例えば浦島太郎などの物語や、市井の人びとによる幻想的で、また哀しい聞き書きが挿入されたりする。ハーンは、物語や逸話の傍らに立って、再話し、また物語を挟みながら、それらを面白さと不思議さをそのままに、別の大きな渦のなかに引き込んでゆく。そして、その渦の中心にあるのが「日本」であり、また「宗教」である。大東氏は、その単著で、この「宗教」に狙いを定め、物語やエッセイに加え、『日本――一つの試論』などの文化論的論考に材をとりながら、それを「思想」として浮き彫りにしようとする。

ハーンの宗教観は、一般に、H・スペンサーからの影響下にあると言われ、「遺伝的記憶」という考え方がその中心にあるとされる。誰しもが月並みな初恋をする。しかし、スペンサーに言わせれば、「人間の感情の中でもっとも強く激しいものは、初めて現れる際にも必ず個人的な経験に先行している」（「旅日記から」）のである。この遺伝的記憶が、ハーン自身によって日本に振り向けられるとき、日本文化の根底にある「祖先崇拝」、すなわち「死者に対する尊崇の念」としてとらえられることになる。大東氏は、このハーンの宗教観を、スペンサーの思想から腑分けしながら、仏教、神道、儒教との比較によって分析してゆく。さらにまた、ハーンの思想が、西田幾多郎、柳宗悦などの日本の思想家とのつながりで考察される。従来のハーン研究にあまり見られなかった、これらの思想史的な検証作業は、ハーンが提示する「日本」と、現代の「日本人」が対座するための、すぐれた契機となるだろう。

もう一方の『入門』は、ハーンの生涯に加え、原語を付したテクストの抜粋からなっている。こちらは、初学者にとっては、文字どおり、よき入門書となろう。